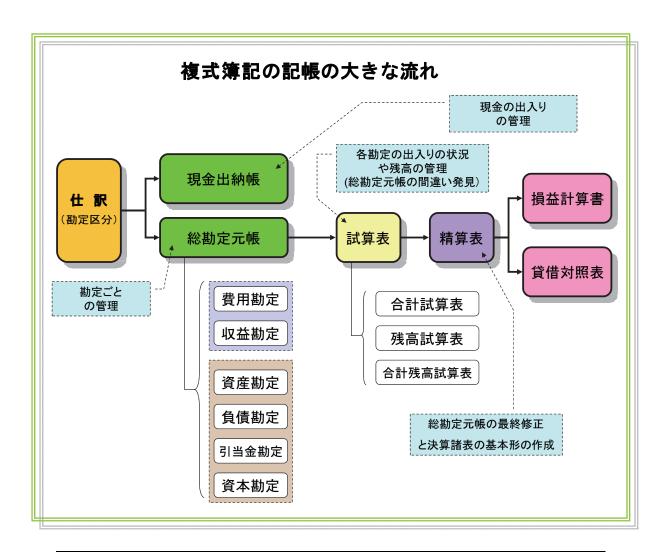
Ⅱ. 記帳の方法

- 1. 記帳の種類 (簿記の種類)
- 2. 記帳の流れ(仕訳から財務諸表の作成まで)

Ⅱ.記帳の方法

1. 記帳の種類(簿記の種類)

- ポイント
- □ 経営は損益と財産の状態の両面に気を配った管理が必要である。
- □ 複式簿記は、損益の発生と財産の増減を関連付けて記録することができる。
- □ 経営全般を見るための簿記=複式簿記。



日常的な記帳の必要性

まず、記帳(簿記)の基本は日々の記録にある。

簿記の目的の一つは"記憶の助けを借りずに過去の活動を明確に記録する(畜産経営者のための青色申告の手引き(社団法人中央畜産会刊)より抜粋)"ことにある。

この基本も、日々の記帳があって初めて成り立つ。

経営の経済活動を管理する手法として簿記による記帳があり、記録の仕方で単式 簿記と複式簿記に大きく分かれる。

まず、単式簿記と複式簿記それぞれの特徴や利点、問題点を簡単に整理すると以下のとおりである。

- 単式簿記 -

- ① 収入と支出(損益)を中心とした記帳。
- ② 財産 (預貯金、固定資産、棚卸し資産、負債等) の増減を完全に記録することができない。
- ③ 損失や利益が発生した原因を明らかにすることができない。
- ④ 簿記上の誤りを検査することができない。

- 複式簿記

- ① 損益の他に経営の財務についての増減も合わせて記録することができる。
- ② 損益の発生と財産の増減について関連付けて記録することができる。
- ③ 一定の方法(原理)に基づいて記録されるため、誤りを自動的に発見することができる。
- ④ 従って、経営全般を見るための簿記=複式簿記。

単式簿記は、1 取引 1 記入の簿記である。例えば、「飼料を 100 万円で購入する」と、単式簿記としては「○月○日 飼料費 100 万円支払い」という費用発生の 1 記録が残る。

しかし、この 100 万円の費用発生に係わり、経営内では「手持ち現金の減少」「貯金から充当したのであれば、貯金残高の減少」、さらには、「飼料の棚卸資産の増加」が起こっている。これらの動きを費用発生に併せて記録していくのが複式簿記である。

複式簿記の目的は、損益の発生と財産の増減を並行して記録し、経営財務を管理 していくことで、一定期間の収支状況とあわせて、投資の影響や借入金の償還能力、 経営の今後の安定性等といった経営バランスを把握していくことにある。

いずれの簿記を採用するかは、その必要性や経営の形態、簿記の目的等から判断して適した方を採用することになる。

しかし、軽種馬経営は、繁殖牝馬、種付料、シンジケート株等に代表されるように、他の畜産経営に比べて掛かる費用は大きく、また、種付から産駒販売までは 2 ~2.5 年と投資の回収までの期間が長く、その販売価格は、種牡馬、繁殖牝馬の血統のみならず、性別、販売時点での兄姉馬の競走成績等に大きく左右されるという不安定な要素をはらんでいる。

このことからも、軽種馬経営においては、財務の管理を損益からの視点だけではなく財産の状態(経営の安定性等)にも十分に気を配った多角的な経営管理が望まれる。 そこで、ここでは、複式簿記を意識して、経営管理の基本となる記帳について、 その方法等について解説していく。

2. 記帳の流れ(仕訳から財務諸表の作成まで)

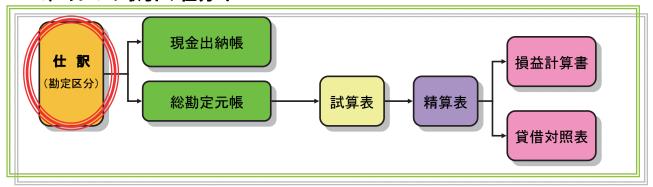
ポイント
日々の取引を整理することから記帳が始まる。(日々取引の整理)
日々の整理から経営の動きの整理へ(現金出納帳、総勘定元帳の整理)
経営の実践過程での経営状態のチェック・記帳の間違い等の早期発見
(試算表の作成)

まず、複式簿記はどのような順序で記帳が行われるのか。

- 簡単な流れは以下の①~④のとおりである。
- ① 日々発生する取引を仕訳帳や伝票を用いて、記帳のための仕訳(勘定区分) を行う。
- ② 仕訳をした結果を、現金出納帳、総勘定元帳の該当する勘定口座に転記する。
- ③ 毎月末(または毎日)に現金ならびに総勘定元帳の各勘定口座ごとに月計または残高を集めて試算表を作成する。
- ④ 決算期には各取引の残高の確認および棚卸や減価償却などを行い、総勘定元帳に決算の修正記入をして最終的な締めを行い、損益計算書ならびに貸借対照表を作成する。

以下、日々の記帳から年度決算としての財務諸表(損益計算書、貸借対照表)の 作成の流れを、具体例を用いて順番に解説していく。

1) 日々の取引の仕分け



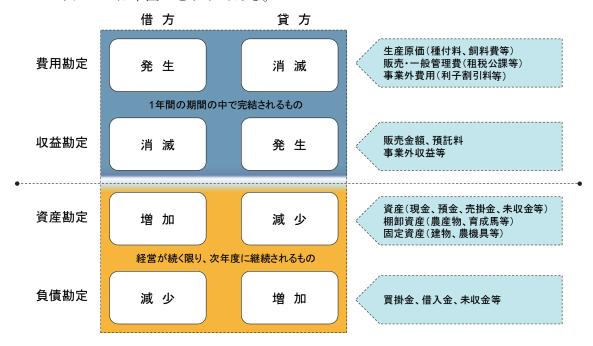
記帳のスタートは、日々発生する取引を仕訳帳や伝票を用いて、取引の種別(勘定)ごとに仕訳することから始まる。

勘定科目の種別・内容について、詳しくはⅢ章で説明する。

ここでは、費用勘定、収益勘定、資産勘定、負債勘定を中心に、仕訳の整理方法を考えてみたい。

まず、仕訳帳等はそれぞれの勘定について、増加と減少などといった関係で左側と右側の2つの金額欄を設けて整理されるのが基本であり、現金出納帳、総勘定元帳も同様である。

イメージは下図のとおりである。



各勘定科目の借方・貸方の関係がわからなくなったら

上図の左右(借方・貸方)の関係が分からなくなった場合は、簡単に次のように覚えるとよい。

自分の経営にとって、

- ○1年間で完結する勘定(費用・収益)は、自分にとってプラスが右側(貸方)に。
- ○次年度以降継続される勘定(資産・負債)は自分にとってプラスが左側(借方)に。

前述の図の関係を分かりやすく解説する。 例えば、ある経営が種付を行ったとする。

種付料は120万円。

このうち、80万円は現金払い、残り40万円は未払い(買掛け)となった。

これを前述の借方・貸方の図で整理すると次のようになる。

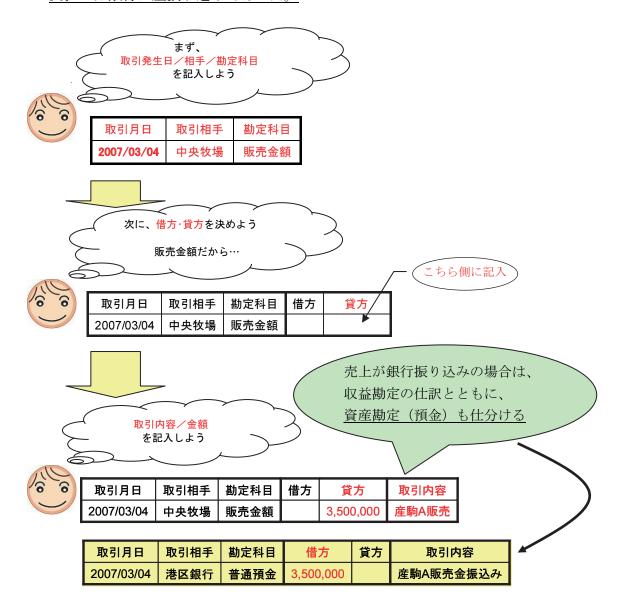
	借方	貸方	
種付料	120 万円発生		
(費用勘定)	120 万円発生		1
現金		80 万円減少	
(資産勘定)		00万円恢少	貝座侧少
買掛金		40 万円増加	 ←負債増加
(負債勘定)		40刀门恒加	` 具限培加

この借方・貸方の関係を基本として、以下のとおり仕訳を行っていくことになる。

- ① 取引発生月日の記入。
- ② 取引相手の記入。
- ③ 取引の勘定科目の確定。
- ④ 各勘定科目について借方・貸方の確定。
- ⑤ 取引内容の記入。
- ⑥ 勘定科目の金額の確定。

① \sim ⑥の流れをイメージすると次のようになる。 例えば、ある経営が産駒を販売したとする。 <u>産</u>駒 \mathbf{A} が中央牧場に 350 万円で売れた。

支払いは銀行口座振り込みであった。



以上の考え方で、取引が発生した際に仕訳を行うことが簿記の第一歩となる。 これらは、取引の事実を証明する証拠書類(領収書、納品書、請求書、仕切書、 通知書、作業日誌)などを基に行っていくことになる。

上記の整理は仕訳の考え方であり、仕訳書のつくり方やその前の伝票整理は、 経営の実情や記帳レベルにあわせて作りやすいようにつくればよい。

要は、日々の取引を分かりやすく整理し、その後の現金出納帳や総勘定元帳の作成が容易なように日々心がけておくことが大切なことである。

2) 現金出納帳・総勘定元帳の該当する勘定口座に転記



前記で仕訳したものを現金出納帳ならびに総勘定元帳に転記(記帳)していく。

現金出納帳

手元の現金の出入りを管理・整理する記録表。

手元への入りか、手元からの出かにより整理していく。

例えば、銀行から 20 万円を引き出して手元に置いた場合は、現金出納は増となる。

逆に、銀行や取引先に手元から代金を支払った場合は、現金出納は減となる。 現金は資産であるから、手元への入り(増)ならば現金出納帳の左側(借方)、 手元からの出(減)ならば現金出納帳の右側(貸方)に整理する。

* *総勘定元帳 * *

勘定科目(勘定口座)ごとの取引を管理・整理する記録表。

大きくは、費用・収益・資産・負債・引当金・資本の6つの勘定科目に分かれる。

細かくは、それぞれの経営の財務諸表(損益計算書、貸借対照表)に用いる科目に細分化し整理することになる。(詳しくはⅢ章を参照。)

この現金出納帳ならびに総勘定元帳が、簿記の最終目的である損益計算書と貸借対照表の作成のための資料となる。

仕訳も現金出納帳や総勘定元帳への記帳も日々行った方がよい。

証拠書類があるからと安心していると訳が分からなくなってくるし、一時にま とめてやる作業は重荷にもなるしミスもおきやすい。

住訳した資料にそって、順番に、現金出納帳、総勘定元帳に記帳していけばよい。複雑なことはなく、慣れてくれば作業ペースもあがってくる。

ただし、現金出納帳、総勘定元帳に記帳するにあたって注意しなければいけないことがある。それは、勘定科目とその分類内容をしっかりと整理しておくことである。

Ⅲ章で詳しく説明するが、勘定科目と分類には一定のルールがある。慣れない うちは、仕訳、記帳時にそのルールに基づいて、当該取引がどの勘定科目に分類 されるのかメモ書きにしていくとよい。

総勘定元帳の内容

記録する内容は次のとおり。

(当該勘定科目名:

取引月日 (取引発生日)	摘 要 (相手方科目)	借 方 (金額)	貸 方 (金額)	借又貸	差引残高 (金額)
i					

取引月日: 仕訳書に書かれた取引発生日を転記。

摘要:相手方(当該勘定科目の発生に伴い対応する勘定科目名)の勘定 科目名を記入。

ただし、毎年度はじめに、前期(前年度)からの繰越高を冒頭に 記入する。繰越高があるのは、資産、負債、資本の3つの勘定で ある。(仮に、月単位で総勘定元帳を整理していく場合は、資産、 負債、資本に加え、他の勘定についても前月繰越を当該月の元帳 の冒頭に記入する。)

借方・貸方: 仕訳書と同じ方に記載された金額を転記。

差引残高: 当該勘定について、借方合計が貸方合計より多い場合を借方 残高、逆の場合を貸方残高という。借方残高の場合は、当期 冒頭の借方の金額から次取引の借方を足し、あるいは貸方の 数値を引き順次、差引額を記載していく。貸方残高の場合は、

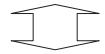
その逆となる。

借又賞: 当該勘定が借方残高に整理される場合は借、その逆の場合は貸 となる。 以下に、取引例を用いて、仕訳書から現金出納帳、総勘定元帳への仕分け方を 説明する。

なお、本来、簿記の整理としては、下表のとおり総勘定元帳の摘要欄には相手 方科目を記入することになる。例えば、種付費の支払いを現金で支払った場合に は、種付費に関する元帳の摘要欄には「現金」と記載され、同日付で現金の元帳 の摘要欄には「種付費」が記載されることになる。

種付費 (費用勘定)

取引月日 (取引発生日)		摘 要 (相手方科目)	借 方 (金額)	貸 方 (金額)	借又貸	差引残高 (金額)
3	30	現金	1,000,000		借	1,000,000



現金(資産勘定)

取引月日 (取引発生日)		摘 要 (相手方科目)	借方(金額)	貸 方 (金額)	借又貸	差引残高 (金額)
3	1	前期繰越	3,000,000		借	3,000,000
3	10	飼料費		200,000	借	2,800,000
3	30	種付費		1,000,000	借	1,800,000

<u>しかし、本教本では、仕訳書と総勘定元帳の繋がりを理解してもらうことに重点を置き、総勘定元帳の摘要には仕訳書例に記載した取引内容をそのまま転記し</u>ている。

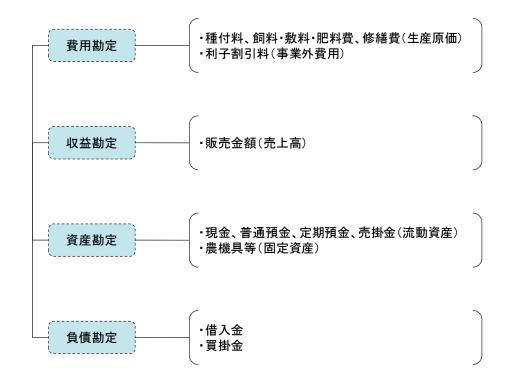
さらに、各表の右端の取引番号は、本教本の中で、仕訳書のどの部分が総勘定 元帳のどの勘定科目に振り分けられるかを理解しやすいように設けた項目である。

(1) 仕訳書の各勘定口座への分解

○仕訳書

取引	月日	取引相手	勘定科目	借方	貸方	取引内容	勘定区分	取引
3	2	株式会社 中央ブリーディング	種付料	1,200,000		種付料A支払い	費用勘定	1
3	2	港区銀行	普通預金		800,000	種付料A支払金振込み	資産勘定	1
3	2		買掛金		400,000	種付料A未払額	負債勘定	1
3	5	中畜牧場	販売金額		200,000	繁殖牝馬B売却収入	収益勘定	2
3	5	港区銀行	普通預金	200,000		繁殖牝馬B売却金振込み	資産勘定	2
3	7	中畜牧場	販売金額		3,500,000	産駒A販売収入	収益勘定	3
3	7	港区銀行	普通預金	3,000,000		産駒A販売金振込み	資産勘定	3
3	7		売掛金	500,000		産駒A販売未収額	資産勘定	3
3	7	港区銀行	普通預金		400,000	種付料A未払金振込み	資産勘定	4
3	7		買掛金	400,000		種付料A未払金の支払い	負債勘定	4
3	15	虎ノ門牧場	販売金額		200,000	産駒C預託料収入(6月分)	収益勘定	5
3	15	港区銀行	普通預金	200,000		産駒C預託料振込み(6月分)	資産勘定	5
3	16		現金		100,000	馬用飼料A購入支払い(7月分)	資産勘定	6
3	16	軽種馬飼料株式会社	飼料・敷料・肥料費	100,000		馬用飼料A購入(7月分)	費用勘定	6
3	20		現金		120,000	車A車検代支払い	資産勘定	7
3	20	中畜修理センター	修繕費	120,000		車A車検代	費用勘定	7
3	23	港区銀行	普通預金		320,000	借入金A利子支払い	資産勘定	8
3	23	港区銀行	利子割引料	320,000		借入金A利子	費用勘定	8
3	29	港区銀行	普通預金		3,400,000	借入金A元金返済振込み	資産勘定	9
3	29	港区銀行	借入金	3,400,000		借入金A元金返済	負債勘定	9
3	29	港区銀行	普通預金	500,000		産駒A販売未収額振込み	資産勘定	10
3	29		売掛金		500,000	産駒A販売未収金	資産勘定	10
3	30	港区銀行	定期預金		2,000,000	軽トラックA購入定期取り崩し	資産勘定	11
3	30	港区銀行	普通預金	2,000,000		軽トラックA購入資金・定期より振替え	資産勘定	11
3	30		農機具等	2,000,000		軽トラックA購入 (資産計上)	資産勘定	12
3	30	港区銀行	普通預金		2,000,000	軽トラックA購入代金振込み	資産勘定	12

上表の仕訳書は次のとおり各勘定区分に分かれる。



具体的には、次のように各勘定科目に整理される。

〇現金出納帳

下表のとおり、現金の出入り(取引)が整理される。

取引月日		勘定科目	取引相手	借方	貸方	取引内容	取引
3	16	現金			100,000	馬用飼料A購入支払い(7月分)	6
3	20	現金			120,000	車A車検代支払い	7

〇総勘定元帳

前出の仕訳書のうち費用勘定、収益勘定、資産勘定、負債勘定に区分される取引を細かな科目に細分化し整理する。

■ 費用勘定

種付料

取引月日		摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	0		借	0	
3	2	種付料A支払い	1,200,000		借	1,200,000	1

飼料・敷料・肥料費

取引月日		摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	450,000		借	450,000	
3	16	馬用飼料A購入(7月分)	100,000		借	550,000	6

修繕費

取引月日		摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	350,000		借	350,000	
3	20	車A車検代	120,000		借	470,000	7

利子割引料

取引月日		摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	0		借	0	
3	23	借入金A利子	320,000		借	320,000	8

■ 収益勘定

<u>販売金額</u>

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越		0	貸	0	
3	5	繁殖牝馬B売却収入		200,000	貸	200,000	2
3	7	産駒A販売収入		3,500,000	貸	3,700,000	3
3	15	産駒C預託料収入(6月分)		200,000	貸	3,900,000	5

■ 資産勘定

現金

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	400,000		借	400,000	
3	16	馬用飼料A購入支払い(7月分)		100,000	借	300,000	6
3	20	車A車検代支払い		120,000	借	180,000	7

<u>普通預金</u>

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	7,000,000		借	7,000,000	
3	2	種付料A支払金振込み		800,000	借	6,200,000	1
3	5	繁殖牝馬B売却金振込み	200,000		借	6,400,000	2
3	7	産駒A販売金振込み	3,000,000		借	9,400,000	3
3	7	種付料A未払金振込み		400,000	借	9,000,000	4
3	15	産駒C預託料振込み(6月分)	200,000		借	9,200,000	5
3	23	借入金A利子支払い		320,000	借	8,880,000	8
3	29	借入金A元金返済振込み		3,400,000	借	5,480,000	9
3	29	産駒A販売未収額振込み	500,000	·	借	9,900,000	10
3	30	軽トラックA購入資金・定期より振替え	2,000,000		借	11,900,000	11
3	30	軽トラックA購入代金振込み		2,000,000	借	9,900,000	12

<u>定期預金</u>

I	取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
ĺ	3	1	前月期繰越	20,000,000		借	20,000,000	
	3	30	軽トラックA購入定期取り崩し		2,000,000	借	18,000,000	11

農機具等

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	28,000,000		借	28,000,000	
3	30	軽トラックA購入(資産計上)	2,000,000		借	30,000,000	12

<u>売掛金</u>

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	700,000		借	700,000	
3	7	産駒A販売未収額	500,000		借	1,200,000	3
3	29	産駒A販売未収金の振込み		500,000	借	700,000	10

■ 負債勘定

買掛金

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越		600,000	貸	600,000	
3	2	種付料A未払額		400,000	貸	1,000,000	1
3	7	種付料A未払金の支払い	400,000		貸	600,000	4

<u>借入金</u>

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越		32,000,000	貸	32,000,000	
3	29	借入金A元金返済	3,400,000		貸	28,600,000	9

(2) 仕訳書と総勘定元帳の関係

ここで、あらためて仕訳書と総勘定元帳の関係を例示により解説すると以下のとおりとなっている。

①飼料費について仕訳書と総勘定元帳の関係を整理すると

馬用飼料A購入支払い(7月分)

車A車検代支払い

○仕訳書

3

16

20

取	引月日		取引相	手	勘定科目	借之	方	贷方]	取引内容	勘定区	分 取引
3	16				現金			【100,000 A	用負	同料A購入支払	ムい(7月分)	資産勘算	宦 6
3	16	軽種馬飼料	斗株式会社	±	飼料・敷料・肥料費	100	,000		馬用餌	同料A購入(7月	1分)	費用勘算	Ē 6
		\	ı <u>-</u>		詞料費は費用勘 発生⇒借方	力定			0	現金は資 目減り	愛産勘定 ↓⇒貸方		
)総甚	が定っ	口帳				- 1					
				<u>- 肥料費</u>					_		I		
		取引	月日		摘要			借方		貸方	借又貸	差引残高	取引
		3	1	前月期繰越	Ì	*	\perp	450,000	<u> </u>		借	450,000	
	<	3	16	馬用飼料A	購入(7月分)			100,000			借	550,000	6
	<u>現金</u>												
	取引月日 摘要					借方		貸方	借又貸	差引残高	取引		
		3	1	前月期繰越				400,00	o ,		借	400,000	

費用の発生と現金(資産)の減少を同時に記録

100,000

120,000

借

300,000

180,000



損益(費用)と財産(現金)の変化が関連付けて整理される。

- ②種付費(支払い)の「銀行口座振り落とし、一部**買掛け**」の例で、仕訳書と総勘定元帳の関係を整理すると
 - 例) 種付費 120 万円の取引きで、「80 万円を普通預金口座から銀行振り込み (3月2日)」「40 万円を買掛けで後日支払った(3月7日)」場合の整理
 - 取引相手が株式会社中央ブリーディングで種付料 120 万円の取引(支払) が発生(3月2日、費用勘定)
 - うち、80万円を普通預金口座から銀行振り込みで支払い 〔取引相手は港区銀行で80万円の普通預金の減(3月2日、資産勘定)〕
 - あわせて、同日(3月2日)に買掛金40万円の負債の増(負債勘定)

以上、3月2日分の取引を仕訳書で整理する。 続いて、

- 3月7日に買掛金40万円を普通預金口座から銀行振り込みで支払い 〔取引相手は港区銀行で40万円の普通預金の減(3月2日、資産勘定)〕
- あわせて、同日(3月7日)に買掛金40万円の負債の減(負債勘定)

以上3月7日分の取引を仕訳書で整理する。 これら、3月2日、3月7日の取引の仕訳をまとめると、次のとおりになる。

■ 仕訳書

取引	月日	取引相手	勘定科目	借方	貸方	取引内容	勘定区分	取引
3	2	株式会社 中央ブリーディング	種付料	1,200,000		種付料A支払い	費用勘定	1
3	2	港区銀行	普通預金		800,000	種付料A支払金振込み	資産勘定	1
3	2		買掛金		400,000	種付料A未払額	負債勘定	1
3	7	港区銀行	普通預金		400,000	種付料A未払金振込み	資産勘定	4
3	7		買掛金	400,000		種付料A未払金の支払い	負債勘定	4

[上記取引の中で起こっていること]

● 3月2日に起きていること

- ⇒種付費に関する取引の発生(費用の発生:120万円)
- ⇒種付費の一部口座振込み(資産の減少:80万円)
- ⇒種付費の一部買掛け(未払い)(負債の増加:40万円)

● 3月7日に起きていること

- ⇒種付費の買掛分の口座振込み(資産の減少:40万円)
- ⇒買掛けの消滅(負債の減少:40万円)

図解すると、下図の水色部分が今回取引に係わり増減・発生が起こっている勘定となる。

 費用勘定
 借方(発生)
120万円の発生
 貸方(消滅)

 資産勘定
 借方(増加)
 貸方(減少)
80万円の減少
40万円の減少

 負債勘定
 借方(減少)
40万円の減少
 貸方(増加)
40万円の増加

以上について、仕訳書と総勘定元帳の関係を整理すると以下のとおりとなる。 (アミカケ部分)

■ 総勘定元帳

普通預金

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	7,000,000		借	7,000,000	
3	2	種付料A支払金振込み		800,000	借	6,200,000	1
3	5	繁殖牝馬B売却金振込み	200,000		借	6,400,000	2
3	7	産駒A販売金振込み	3,000,000		借	9,400,000	3
3	7	種付料A未払金振込み		400,000	借	9,000,000	4
3	15	産駒C預託料振込み(6月分)	200,000		借	9,200,000	5
3	23	借入金A利子支払い		320,000	借	8,880,000	8
3	29	借入金A元金返済振込み		3,400,000	借	5,480,000	9
3	29	産駒A販売未収額振込み	500,000		借	9,900,000	10
3	30	軽トラックA購入資金・定期より振替え	2,000,000		借	11,900,000	11
3	30	軽トラックA購入代金振込み		2,000,000	借	9,900,000	12

買掛金

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越		600,000	貸	600,000	
3	2	種付料A未払額		400,000	貸	1,000,000	1
3	7	種付料A未払金の支払い	400,000		貸	600,000	4

種付料

	取引月日		摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
	3	1	前月期繰越	0		借	0	
Г	3	2	種付料A支払い	1,200,000		借	1,200,000	1

③産駒販売(収入)の「銀行口座振込みで、一部**売掛け**」の例で、仕訳書と総勘定元帳の関係を整理すると

- 例) 産駒販売 350 万円の取引きで、「300 万円が銀行振り込み (3 月 7 日)」「50 万円が売掛けで後日入金 (3 月 29 日)」の場合の整理は、
- 取引相手が中畜牧場で産駒販売 350 万円の取引 (売上) が発生 (3月7日、収益勘定)
- うち、300万円が銀行振り込みで入金 〔取引相手は港区銀行で300万円の普通預金の増(3月7日、資産勘定)〕
- あわせて、同日(3月7日)に売掛金50万円の資産の増(資産勘定)

以上、3月7日分の取引を仕訳書で整理する。 続いて、

- 3月29日に売掛金50万円が銀行振り込みで入金 〔取引相手は港区銀行で50万円の普通預金の増(3月29日、資産勘定)〕
- あわせて、同日(3月29日)に売掛金50万円の資産の減(資産勘定)

以上3月29日分の取引を仕訳書で整理する。 これら、3月7日、29日の取引の仕訳をまとめると、次のとおりになる。

■ 仕訳書

取引	取引月日 取引相手		勘定科目	借方貸方		取引内容	勘定区分	取引
3	7	中畜牧場	販売金額 3,500,000 産駒A販売収入 4		収益勘定	3		
3	7	港区銀行	普通預金	3,000,000		産駒A販売金振込み		3
3	7		売掛金	500,000		産駒A販売未収額	資産勘定	3
3	29	港区銀行	普通預金	500,000		産駒A販売未収額振込み	資産勘定	10
3	3 29		売掛金		500,000	産駒A販売未収金	資産勘定	10

[上記取引の中で起こっていること]

● 3月7日に起きていること

- ⇒産駒販売に関する取引の発生(収益の発生:350万円)
- ⇒産駒販売金の一部口座振込み(資産の増加:300万円)
- ⇒産駒販売の一部売掛け(未収)(資産の増加:50万円)

● 3月29日に起きていること

- ⇒産駒販売金の売掛分の口座振込み(資産の増加:50万円)
- ⇒売掛けの消滅(資産の減少:50万円)

図解すると、下図の水色部分が今回取引に係わり増減・発生が起こっている勘定となる。

収益勘定

借方(消滅)

貸方(発生) 350万円の発生

資産勘定

借方(増加) 300万円の増加 50万円の増加(売掛) 50万円の増加(預金)

貸方(減少) 50万円の減少

以上について、仕訳書と総勘定元帳の関係を整理すると以下のとおりとなる。 (アミカケ部分)

■ 総勘定元帳

普通預金

取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	7,000,000		借	7,000,000	
3	2	種付料A支払金振込み		800,000	借	6,200,000	1
3	5	繁殖牝馬B売却金振込み	200,000		借	6,400,000	2
3	7	産駒A販売金振込み	3,000,000		借	9,400,000	3
3	7	種付料A未払金振込み		400,000	借	9,000,000	4
3	15	産駒C預託料振込み(6月分)	200,000		借	9,200,000	5
3	23	借入金A利子支払い		320,000	借	8,880,000	8
3	29	借入金A元金返済振込み		3,400,000	借	5,480,000	9
3	29	産駒A販売未収額振込み	500,000		借	9,900,000	10
3	30	軽トラックA購入資金・定期より振替え	2,000,000		借	11,900,000	11
3	30	軽トラックA購入代金振込み		2,000,000	借	9,900,000	12

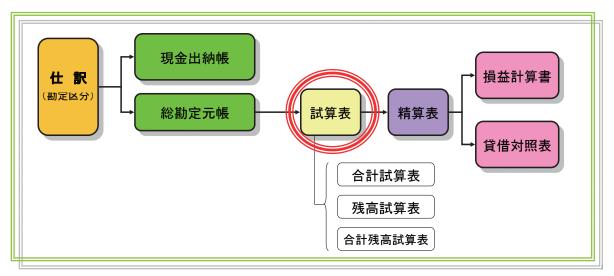
売掛金

取引月日		摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越	700,000		借	700,000	
3	7	産駒A販売未収額	500,000		借	1,200,000	3
3	29	産駒A販売未収金の振込み		500,000	借	700,000	10

販売金額

取引月日		摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引
3	1	前月期繰越		0	貸	0	
3	5	繁殖牝馬B売却収入		200,000	貸	200,000	2
3	7	産駒A販売収入		3,500,000	貸	3,700,000	3
3	15	産駒C預託料収入(6月分)		200,000	貸	3,900,000	5

3) 試算表の作成



現金出納帳や総勘定元帳の記帳がはじまったら、次に行うことは試算表の作成である。

これは、日々の仕訳、現金出納帳、総勘定元帳の記帳が正しく行われているかをチェックするもので、総勘定元帳から作成する。

試算表は、以下の種類に分かれる。

① 合計試算表

総勘定元帳の勘定科目毎に借方・貸方の各合計の一覧表を作成する。この 一覧表を合計試算表と言う。

② 残高試算表

総勘定元帳の各勘定科目の差引残高(借方残高、または貸方残高)を一覧 表に整理する。この一覧表を残高試算表と言う。

残高試算表は損益計算書、貸借対照表の作成のための基礎資料となる。

③ 合計残高試算表

合計試算表と残高試算表を一表に整理したものが合計残高試算表である。

試算表の作成は、経営の実践過程を、試算表を作成する一定期間毎に振り返り、 経営の課題を発見することにもつながる。

試算表を月に1度(遅くとも4半期に一度)は作成し、記帳が正確に行われているかをできるだけこまめに確認したい。

試算表の作成の流れ

- ① まず、現金出納帳、総勘定元帳の、その月の合計額や残高を計算する。
- ② 次に、合計試算表や残高試算表に各勘定の金額を記入する。
- ③ それを基に、借方金額の合計と貸方金額の合計を計算する。
- ④ それぞれの合計が一致すれば正しく記帳が行われているということになり、違っていれば現金出納帳、総勘定元帳を確認する。

(1) 合計試算表の作成

合計試算表は、総勘定元帳等の記帳が正確に行われているかをチェックする 役割がある。それとともに、一定期間の経費の状況や収益の状況、資産・負債 の状況等を把握することで、その期間に発生している経営の課題点を探るため の基礎資料ともなりえる。

合計試算表の作成の仕方は、まず、総勘定元帳の各勘定科目別に借方・貸方 それぞれの合計額を出す。

それを一覧表に落とすと、合計試算表ができる。

販売	金額							
取引	月日	摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引	
3 1 前月期繰越				0	貸	0		
3	5	繁殖牝馬B売却収入		200,000	貸	200,000	2	
3	7	産駒A販売収入		3,500,000	貸	3,700,000	3	
3	15	産駒C預託料収入(6月分)		200,000	貸	3,900,000	5	
<u>杜買</u>	<u>金</u>	合計額	×		合計額			
取引月日		摘要	借方	貸方	借又貸	差引残高	取引	
3	3 1 前月期繰越			600,000	貸	600,000		
3	2	種付料A未払額		400,000	貸	1,000,000	1	
3 7		種付料A未払金の支払い	400,000		貸	600,000	4	

合計試算表

借方	勘定科目	貸方
400,000	現金	220,000
12,900,000	普通預金	6,920,000
20,000,000	定期預金	2,000,000
1,200,000	売掛金	500,000
30,000,000	農機具等	
400,000	買掛金	1,000,000
3,400,000	借入金	32,000,000
	資本勘定	24,300,000
1,200,000	種付料	
550,000	飼料·敷料·肥料費	
470,000	修繕費	
320,000	利子割引料	
	販売金額	3,900,000
70,840,000	合計	70,840,000

借方の総合計=貸方の総合計となる。

すべての取引は借方金額と貸方金額が等しくなるよう に仕分けされている。

例えば、種付料 120 万円を現金で支払った場合、

〇費用勘定として、種付料 120 万円の支払取引が発生

勘定内容	借方	貸方
費用勘定(種付料)	1,200,000	

〇同時に、資産勘定として 120 万円の資産減が発生

勘定内容	借方	貸方
資産勘定 (現金)		1,200,000

この積み重ねで総勘定元帳は作成されていくことになる。そして、各勘定科目の借方合計、貸方合計を整理した ものが合計試算表である。

合計試算表で借方・貸方の合計額が一致しない場合は、 総勘定元帳の整理に誤りがあることになる。

(2) 残高試算表の作成

合計試算表に対して、残高試算表は総勘定元帳の各勘定科目ごとの差引残高 を、借方残高、貸方残高に分けて表示したものが残高試算表である。

残高試算表についても、合計試算表と同様に借方残高の総合計と貸方残高の総合計は一致する。合計額が合わない場合は、いずれかの勘定科目の残高計算に誤りがあるということになる。

残高試算表

借方	勘定科目	貸方	
180,000	現金		
9,900,000	普通預金		
18,000,000	定期預金		
700,000	売掛金		
30,000,000	農機具等		
	買掛金	600,000	
	借入金	28,600,000	
	資本勘定	28,220,000	_
1,200,000	種付料		
550,000	飼料・敷料・肥料費		
470,000	修繕費		
320,000	利子割引料		
	販売金額	3,900,000	
61,320,000	合計	61,320,000	
	180,000 9,900,000 18,000,000 700,000 30,000,000 1,200,000 550,000 470,000 320,000	180,000 現金 9,900,000 普通預金 18,000,000 定期預金 700,000 売掛金 30,000,000 農機具等 買掛金 借入金 資本勘定 1,200,000 種付料 550,000 飼料·敷料·肥料費 470,000 修繕費 320,000 利子割引料 販売金額	180,000 現金 9,900,000 普通預金 18,000,000 定期預金 700,000 売掛金 30,000,000 農機具等 買掛金 600,000 借入金 28,600,000 資本勘定 28,220,000 1,200,000 種付料 550,000 飼料・敷料・肥料費 470,000 修繕費 320,000 利子割引料 販売金額 3,900,000

資産・負債・資本勘定等の項目

費用・収益勘定の項目

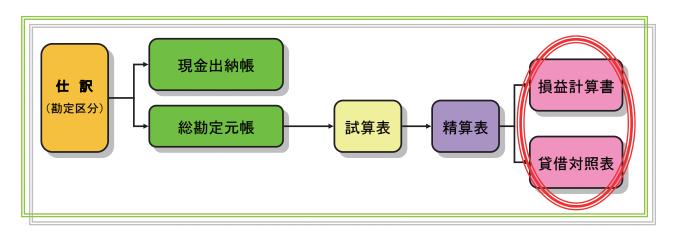
(3) 合計残高試算表の作成

以上の合計試算表、残高試算表をまとめたものが合計残高試算表である。 借方、貸方の合計同士、残高同士が一致しない場合は、勘定科目ごとに確認 し間違いを発見するようにする。

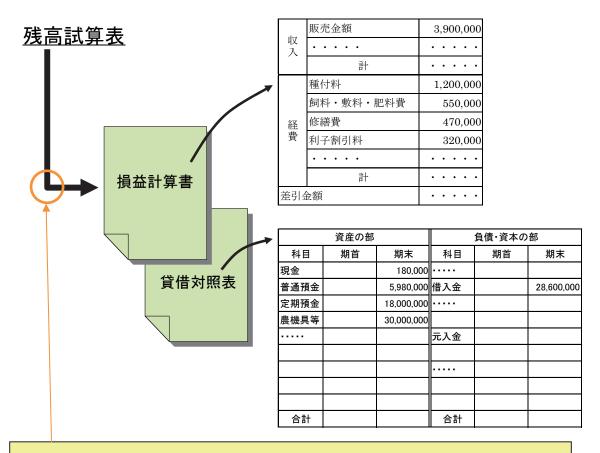
合計残高試算表

借	方	勘定科目	貸	方	
残高	合計	一一一一一	合計	残高	
180,000	400,000	現金	220,000		
9,900,000	12,900,000	普通預金	6,920,000		
18,000,000	20,000,000	定期預金	2,000,000		
700,000	1,200,000	売掛金	500,000		
30,000,000	30,000,000	農機具等			
	400,000	買掛金	1,000,000	600,000	
	3,400,000	借入金	32,000,000	28,600,000	
	(資本勘定	24,300,000	28,220,000	
 1,200,000	1,200,000	 種付料			
550,000	550,000	飼料・敷料・肥料費			
470,000	470,000	修繕費			
320,000	320,000	利子割引料)		
		販売金額	3,900,000	3,900,000	
61,320,000	70,840,000	合計	70,840,000	61,320,000	

4) 損益計算書、貸借対照表の作成



1年間の残高試算表ができたら、その結果から青色申告決算書の損益計算書、貸借対照表が出来上がることになる。



* * 修正記入 * *

残高試算表から損益計算書、貸借対照表を作成する過程で、実際には総勘定元帳の修正とそれに基づく精算表(残高試算表の修正と損益計算書、貸借対照表の基本形)を作成することとなる。

(1) 損益計算書の作成

残高試算表と損益計算書との関係を具体例で示すと以下のとおりである。 残高試算表の勘定科目のうち費用勘定、収益勘定に分類される科目について 借方(経費)又は貸方(収入)の残高が損益計算書の該当科目に記載されるこ とになる。

残高試算表

	借方	勘定科目	貸方	
	180,000	現金		
	9,900,000	普通預金		
	18,000,000	定期預金		
	700,000	売掛金		
	30,000,000	農機具等		
		買掛金	600,000	
		借入金	28,600,000	
	L	資本勘定	28,220,000	
1	1,200,000	 種付料		
I	550,000	飼料·敷料·肥料費		- 1
	470,000	修繕費		i.
!	320,000	利子割引料		·
		販売金額	3,900,000	1
-	61,320,000	一一百計	61,320,000	

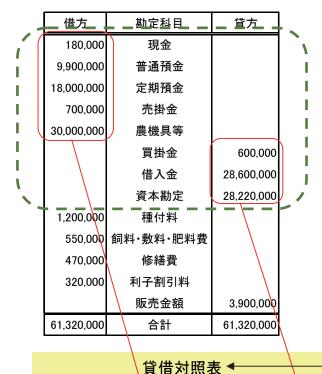
	損益					計	算書(自	月	日	至	月		日)			
	1	排目		軽種馬	農業		科目		軽種馬	農業			科目		軽種馬	農業
	販売金額		1	3,900,000			消耗品費 18		円	P	9	差	引金額	36	円	Ħ
	預託料		2				共済掛金·保険料	19				(8-35)		30		
	家事消費 事業消費		3] [家畜医療費	20					貸倒引当金	37		
収	雑収入		4] [旅費·通信費	21				繰越額等		38		
入金		\計 +③+④)	5] [販売·仲介手数料	22				額等		39		
額	農産物の	期首	6] [利子割引料	23	320,000		各		計	40		
	棚卸高	期末	7] [放牧管理費	24			種引出	11	専従者給与	41		
		it	8			1 [雇人費	25			金金		貸倒引当金	42		
	(⑤-	6+7)	8				非馬 減価償却費	26			1	入額 等		43		
	租利	松課	9			程費	井馬以外のもの	27			1	等		44		
	種	付料	10	1,200,000		1 [地代、賃借料	28			1		計	45		
	種	苗費	11			1 [各種負担金	29			T		5特別控除前の 頁(36+40-45)	46		
		料·肥料費	12	550,000				30				青色申告 特別	65万円又は 10万円と46 とのいずれ	47		
経費	農	具費	13			Ш	雑費	31				控除額	か少ない方の金額	4,		
	衛生・	農薬費	14] [小計	32					免税所得〕 行得金額	48		内
	諸村	料費	15				農産物以外期首	33			L		11年並祖 46-47)	48		
	修	繕費	16	470,000			の棚卸高期末	34								
	動力	光熱費	17			1	計 (32+33-34)	35			1					

(2) 貸借対照表の作成

残高試算表と貸借対照表との関係を具体例で示す以下のとおりである。

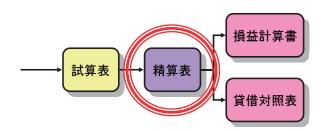
残高試算表の勘定科目のうち資産勘定、負債勘定、引当金勘定、資本勘定に 分類される科目について借方(資産の部)又は貸方(負債・資本の部)の残高 が貸借対照表の該当科目に記載されることになる。

残高試算表



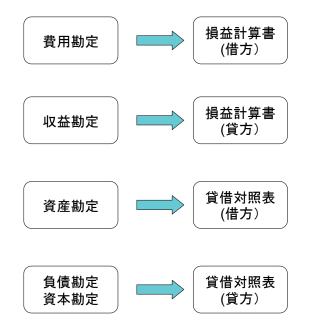
(平成 年 日現在) 資産の部 負債・資本の部 月 日(期首) 月 日(期末) 月 日(期首) 月 日(期末) 科目 科目 180,000 掛 600,000 28,600,000 18,000,000 その他の預金 700,000 産 物 等 債権償却特別勘定 ま物・構築物 30,000,000 機具等 上 地 改 良 事 業 受 益 者 負 担 金 28,220,000 青色申告特別控除 前 の 所 得 金 額 第 業 主 貸 57,420,000 ※所得税青色申告決算書の 貸借対照表の様式例では 「貸借対照表(資産負債 調)」と表記している。

(3) 精算表の作成



精算表は合計残高試算表に要約された総勘定元帳の勘定科目ごとに決算修正を加えて、損益計算書と貸借対照表を一覧表の形式で作成するための表である。 精算表の完成までの作成手順は次のとおりである。

- ① 残高試算表欄を作成する。
- ② 総勘定元帳の修正科目を修正記入欄に記入する。
- ③ 残高試算表欄と修正記入欄の記入内容から修正後試算表欄を作成する。
- ④ 修正後試算表欄から損益計算書欄、貸借対照表欄に転記する。



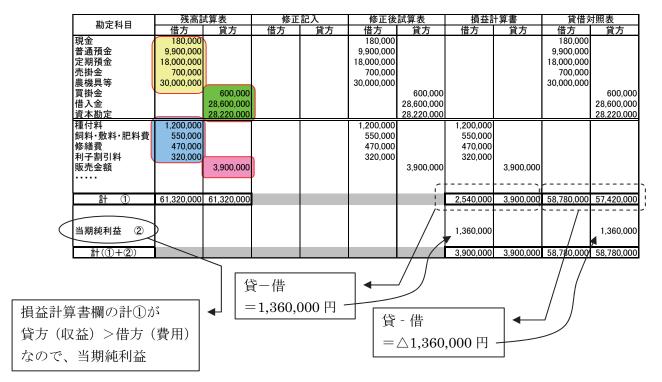
- ⑤ 損益計算書、貸借対照表の金額をそれぞれ集計し、両者とも**貸借のそれぞ** れの合計額が一致せず、その差額が同額であることを確認する。
- ⑥ 貸借の差額を純損益として記載する。
 - ※貸方の合計と借方の合計を比較し、その差額を少ない方に純損益として 記入し、貸借の合計を一致させる。
 - ⇒収益>費用の時は"純利益"
 - ⇒収益<費用の時は"純損失"

[残高試算表から精算表を作成する]

残高試算表

1		
借方	勘定科目	貸方
180,000	現金	
9,900,000	普通預金	
18,000,000	定期預金	
700,000	売掛金	
30,000,000	農機具等	
	買掛金	600,000
	借入金	28,600,000
	資本勘定	28,220,000
1,200,000	種付料	
550,000	飼料·敷料·肥料費	
470,000	修繕費	
320,000	利子割引料	
	販売金額	3,900,000
61,320,000	合計	61,320,000





5) 記帳における組合員勘定取引(クミカン)の活用

記帳に求められるのは、正確性とあわせて、如何に効率よく行っていくかにある。

これは、記帳のみならず、経営分析等にも同様のことが言え、既存のデータ、 資料を如何にうまく活用するかによって、取りまとめに掛る時間は大幅に違って くる。

正確性と効率性という視点で考えた場合、勘定科目の整理において、クミカンを用いることは有効な手段と言える。

取引月日、取引内容、営農コードによる種別等が明記されているクミカンは経 営実績を整理する上で、また経営を分析する上で貴重なデータとなる。

基本的には営農コードによる種別により、費用・収益に係わる勘定科目は概ね 整理される。

これにあわせて、資産・負債等の勘定科目を整理していく。

月締め等で出てくるクミカンに経営者が自ら目を通し、取引の整理を行っていくことで、格段に記帳の流れはスピードアップする。また、クミカン情報を適宜確認することで、自身の経営の現在の取り組み実態、経費の支出状況、収入状況を把握でき、現在の経営の状態を実感することができる。

気づいた時には、時遅しとならないようにするためにも、経営の実態を明示しているクミカンを重要な情報源として活用したい。

もし、クミカンを経営にあまり活用していないようであったら、一度その利用 の仕方・活用の仕方を考えてみることは意味のあることである。

また、営農指導の面から言えば、このクミカンデータを経営分析等に有効に活用している支援組織が全国に散見される。

経営分析のためのデータ整理は、一からデータを収集することから常に始まるのではなく、手元や周りにあるデータを如何に活用するかを始めに考えることから始めることが肝要である。